

瑞宝殿再建記念 五月三十一日昼仙台歌  
 琴 公 演 前日立フアミリーホール  
 主催東北琵琶連盟、後援河北新聞外。左記演  
 奏の外旧仙台藩主伊達正宗御霊屋瑞宝殿の再  
 建を記念した新作「仙台城と伊達政宗」の発  
 表があり超満員の盛会裡に終始した。城山の  
 月一阿部 乞食瓢六一小形錦州 われらのし  
 あわせ一阿部万二 湖水乗切一吉田錦溪 衣  
 川一野本旭栄 舟弁慶一佐藤健水 川中島一  
 長沢龜水 白虎隊一南緑水 竜の口一菅野有  
 水 仙台城と伊達政宗一阿部吉州。外に桜井  
 清心、千坂冠桜、佐々木周行、木下園長各氏  
 其他の詩吟八題。

都派琵琶錦穂会 六月一日夕五時半東京  
 一門演奏会 上野本牧亭、主催錦穂後  
 援会、後援日本琵琶楽協会外(五〇〇円)。  
 悪天候にも拘らず超満員の盛況で近來に例を  
 見ない成功であった。白虎隊一穂蘭 菅公一  
 穂泉 重衡一穂和 伊那の曲一穂静 扇の的  
 穂鳳 竜の口一穂峰 富士一会員合奏 常陸  
 丸一穂繁 本能寺一穂仙 井伊大老一穂芳  
 新撰組一穂苑 子育桜観世音一穂穂(以下来  
 賓)坂崎出羽守一加藤錦陽 石重丸一甲田勳  
 水 勳進帳一石田脩水、長谷川錦舟、絃錦穂  
 大原御幸一会主都錦穂。

第二十四回琵琶 六月一日昼楽寿荘。敦  
 を楽しむ会総会 盛一田中鯉水 小栗栖一  
 筑前琵琶 六月六日昼東京日本橋三越劇  
 紅会公演 場、主催紅会。東京花形女流の  
 集りて主軸は押田旭窈女史、盛会裡に終始し  
 た。会歌くれない一會員一同 大高源吾一石  
 井旭良 山吹の夢一旭盛、旭粧、旭連、旭美  
 美、旭治、旭昌、旭芳、本能寺一深谷旭繁、  
 絃都錦穂 湖水渡一三上旭鳳 衣川一田中旭  
 千栄、絃旭窈 時雨曾我一水藤五郎 若き敦  
 盛一仲川旭明、絃旭窈 彰義隊一須田誠舟  
 大物の浦一若宮旭登 法然上人一宮武旭豊  
 舞踊あやめ一旭粧、旭豊、絃旭窈、旭柳、旭  
 鳳、立方付 羅生門一旭潮、旭柳、絃旭窈  
 名将加藤清正一原島旭粧 おもかげ一押田旭  
 窈 剣舞西郷隆盛一吟若水桜松 生々流転一  
 旭窈外十人、琴、笛付。

告  
 京都琵琶協会七月定例茶話会 七月五  
 日(日) 昼一時會員平井春嶺氏宅  
 ○筑前琵琶青葉会演奏会 七月六日(水)  
 屋一時大阪難波高島屋七階ホール  
 ○祇園祭協賛各流派合同琵琶演奏会 七月  
 二十三日(水) 夕五時京都四條八坂神社能  
 楽堂、京都琵琶協会協賛。

○琵琶を楽しむ会 (ゆかた会) 八月三日(日) 十時一十六時京阪電車光善寺駅下車、楽寿荘一参加自由。

あ うつとおしい梅雨の毎日がつゞき  
 と 辛気臭いことで琵琶の絃も湿ってよ  
 が い首締めが出ないし楽器のお守りも  
 き 仲々苦勞である●やがて梅雨明けと  
 もなれば又暑い真夏に悩まされる●京絃は琵  
 琶文化の向上と発展に常々心を砕いているが  
 このほど研秀出版株式会社発行の「日本の歴  
 史第五巻源平争乱」という立派な本が手に入  
 った●編纂者を喜ばせた●既に御覧になったお  
 方もあると思うが菊版二二〇頁、数葉のグラ  
 ビア極彩色写真人の豪華版で有名な方々が執  
 筆され琵琶人にゆかりの深い平家物語関係の  
 記事が充満してどの稿を読んでも我々琵琶人  
 は啓蒙される●早速京絃紙に転載を出版社に  
 お願したところ琵琶楽興隆のため快諾を得  
 たので重ねて執筆各氏の諒解を得た上で今後  
 時々抜萃掲載して同好諸氏に喜ぶ●八月号は  
 例年の通り銷夏特別号として意義ある記事を  
 満載し併せて同好者相互間の健在を祝福する  
 名刺交換を暑中見舞として大々的に掲載させ  
 て欲しい●どうか奮って御協賛下さい。

昭和五十年七月一日発行(非売品)  
 編集者 植村 真 水  
 発行所 京 絃 社  
 〒569 高槻市津之江北町一ノ二二三  
 電話 〇七二六(八五六〇五一番)

琵琶 機関紙

京

絃

第二五三号 京 絃 社

私の音楽ノート (五)

水 藤 五 郎



プロの会、アマの会  
 今春は各地で琵琶演奏会が多く開かれた様  
 で、私もかなりのプログラムをいただきました  
 た。その内容も種々でありましたが、今春は  
 演奏会が特に多かつたと思いましたが、勿論、  
 社会的基準に照らしてみると大変に淋しい数  
 なのではあります。琵琶界のみに限って比  
 較してみると、近年になく盛んであったと思  
 います。

過去の名人、大家が多い社会であった昭和  
 三十年前後の斯界が、戦後の一つのピークで  
 あるとするならば、今春は、その名人大家終  
 焉の一つのピークなのでありましようか。則  
 ち、過去の流行期に在って相当な芸術的評価  
 を得て、プロとして自他ともに許してきた人  
 々が、この世を一人去り、又一人去り、或い  
 は芸術家としての立場を失って、そのまゝ病  
 床に臥している等の現実に直面している今日、  
 その過去を閉じるページともなる時期が到来  
 したのでありましよう。そしてそれは一面、

新しい日々の訪れとも云えるのであります。  
 但し、それは危険な日々でもあるのですが、  
 多くのプログラムを読みますと、殆どそれ  
 が一門の温習会、同好会の発表会でありまし  
 た。ただし入場無料であります。ごく当然の  
 ことでありましよう。

この種の会で入場料を〇〇円取るとするの  
 は、今日の斯界の状況から考えてあまり良い  
 方法ではないと思えます。何故ならば、アマ  
 チュアの集まりであり、その発表会だからで  
 あります。プロ、準プロ、そしてプロ組織の  
 ない、非商業音楽会だからであります。  
 私は時折一本誌上や、その他の機会に於て  
 も「琵琶会を無料で開くのはよくない、有  
 料にしないと権威がない」と云う意見を聞き  
 ますが、この考え方は一理あって百害多しと  
 なる恐れがある様に思えます。今日の琵琶会  
 の料金は、五百円から二千円前後が普通でし  
 よりから、洋楽系の音楽会、特にオペラの三  
 万円、五万円等の入場料から見ると、全くゼ

口に等しく思われます。「能」の会などは、  
 三千円から五千円が最低で、舞踊の会も  
 それに近づいています。この様を上と比較し  
 て「安い」と考え、詩吟、民謡などの無料か  
 ら考えて「高い」と考える。これは早計な判  
 断でありましよう。オペラの三万円は別例と  
 して、私共がごく当り前の入場料と考えるの  
 は何十円、何百円、そして何千円なのでし  
 ろう。これはよく考えないと難問なのです。今、  
 オペラを別例と云ったのは、そのオペラの多  
 くは外国タレントが演奏する会であり、入場  
 料何万円の中には、ホテル代、旅行費等が相  
 当にブールされているからであって純粋な芸  
 術鑑賞論では解決できないのですから、一応  
 別例としたのであります。

そこで、琵琶会の入場料についてでありま  
 すが、無意味に有料制を主張することには疑  
 問があります。そして今日の状況では、有料  
 会には相当な努力が要求されるのであります。  
 一門の発表会について考えてみると、その門  
 人が切符を売り、先生が切符を作り、演奏は  
 共同して、このパターンはプロでもアマでも  
 同様で、師弟の間柄に差はありません。ただ、  
 ここで注意するのは、プロとその門人、則ち  
 アマチュアと云う形態、その門人も全てプロ  
 であって、客席から見ると出演者の大半がプ  
 ロである形態の相異であります。前者は師が  
 プロで、その門下はアマチュア、後者は師が  
 プロ、その門下もプロで、当然孫弟子にあた  
 る第二の門下、いや第三の門下がアマチュア

になる、この二つの会を区別することであり、〇〇一門会」と記された演奏会に、有料と無料の区別はつけられる可きであり、演奏することに全力を傾けるのが、その成果の発表が温習会、一門会に於けるアマチュアの楽しみであり、勉強である筈です。そこへ切符、則ち前売券を売る努力を強めるのです。又、売ることば売れても、買った聴衆は、〇〇円の有料会として聴く以上は、当然厳しい批評を持つのであります。通りすがりに入場する人があるとしたら、金を取ってやる芸か、などと批評するかもしれません。それが有料会の真の姿なのです。義理や友情で売り歩くのはプロのする仕事で、アマチュアは、楽しく、落語の「寝床」で良いでしょう。正しいアマチュア精神と、きびしいプロ精神が楽しい御招待会と、感動する有料会とを生み出すのであります。この意味から考えると、二十数曲も乱立された名流演奏会なるタイトルルのが、先日開催され、その客席が淋しく、さしたる成果がうかがわれなかつた現実、それが千円の入場料制をとつたことを考え合わせてみて、再考するべきでありましょう。無策な有料制への批評でもありません。

五月二十四日の浅野晴風リサイタルに於ける晴風師の熱演は、これとは全く逆に「感動する有料会」にふさわしいものであります。ここには千円でも二千円でも「来て良かった」と云う満足感があつたと思ひます。芸術、琵琶の権威者でした。

狂醉亭漫録 (百十三)  
利休処刑事情 (一)

古谷 寛水

次にお吟の父といふ松永正の略歴は、松永久秀(一五一〇—一五七七)三好長慶の家宰にして弾正少弼と称す。三好氏は世々阿波に住して細川氏に仕え、漸次に勢を得たが長慶に至りて最も勢力を得、天文中長慶の京都に入るや、久秀また従つて京都を鎮撫し、権勢殆ど主家を凌ぐ。永禄初め大和に入り城を信貴山に築き、國中の豪族征服せんとし、筒井、十市、小泉、小田切等の諸氏と戦ひ、城を眉間寺に築きて多聞城といふ。六年長慶の子義興(初め義長)の賢を忌み、これを毒殺す。長慶これを知らずしてその死を痛み、これより愾武を廢し、同族義継を養つて嗣とす。久秀これに乗じ、嗣権を専にす。長慶遂に七年を以て憂死し、嗣子義継をお幼なるに乘じ久秀益々専横を極む。將軍足利義輝これを厭ひ密に謀るところあつた。ここに於て久秀、義継等と謀り、永禄八年五月俄に二条城を襲ひ、義輝敵せずして自殺し、京都は混乱に陥つた。時に大和にあつては筒井順昭既に歿し、子順慶立つたが、歳なお幼にして久秀と戦ひて敗れ、三好の三党なる三好長逸、同政康並に岩成友通に結び、久秀と争ひ。永禄十年十月久秀は政康、友通等の拠れる東大寺に夜襲を試み、火を失して遂に東大寺を焼き、大仏殿等を烏有に帰せしめた。ここに於て三好三党敗れ、京摂の地は久秀の勢力に帰した。然るに翌年織田信長の足利義昭を奉じて入京するや久秀之に降る。義昭は將軍義輝の死が久秀等の劃するところなりしを以て之を殺して甘心せんとしたが、信長は久秀の久しく京摂の間に勢力があつたから、寧ろこれを利用せんとしたものである。意に反して降を許し、信長の石山本願寺攻囲軍中に従つて天王寺の塞を守つた。然るに天正五年八月久秀俄に陣を撤して居城信貴山に帰つて叛した。ここに於て信長、世子信忠を將とし、細川藤孝、明智光秀、筒井順慶等をしてこれを撃たしめ、火を放つて攻む。久秀防ぐ能わず火に入つて自殺す。時に年六十八。久秀謀叛の原因については甚だ明瞭を欠く。伝うるところによれば、家康の嘗て信長に謁する時、座に久秀あり、信長は之を指して曰く、此の翁常人の難しとするところのもの三をなせり、曰く將軍義輝を弑す、曰く三好氏に叛す、曰く大仏殿を焼毀すと。久秀これを聞き慚汗背を潤したといふ。久秀平生茶事を學びて蒐めたところの茶器少なくなかつたがその死に臨み、己の首と年来秘蔵せる平蜘蛛の釜は信長の目に触れさせじとて微塵に碎いて自殺したと云われる。

関白秀吉が千利休に切腹を命じた直接の理

由は、利休が大徳寺の僧古溪の契めにより、大徳寺三門の楼上に自身の木像を据えた事が秀吉の怒りに触れたと云うのであるが、事の正邪は兎に角として古溪とは如何なる人物か残念乍ら適当な資料が無いので判明せぬが、偶然手許に在つた禅宗関係の一書の巻末に、大徳寺世代略譜なるものが記載されているので、それによると、

- 一一七世 古溪 宗陳 大慈院広照禪師
- 越前の人 笑嶺の法嗣 総見院を建つ
- 号蒲庵 慶長二年遷化 年六十六
- とあるのみで詳細は判明せず、唯大徳寺歴代管長(現代語)の一人である事は知られる。
- さて古溪の次代の三人の欄を見ると、
- 一一八世 梅隱 宗香 但馬の人
- 大室の法嗣 天正十七年遷化 年六十六
- 一一九世 真叔 宗根 筑後の人
- 拾雲の法嗣 豊後大智寺住
- 天正十五年遷化 年不明
- 一二〇世 笑隱 宗听 江州の人
- 拾雲の法嗣 瑞峰院住
- 天正十四年遷化 年不明

此の一連の年代表を見て不思議に感ぜられるのは、古溪に次ぐ三代の管長が、古溪在世中に皆早死している事である。古溪は歿年六十六歳であるのに、後の三代の死を見送つた事は、余程若年の頃就位し、又退位後永年生き永らえた事は判るが、この各人の就退位の年代が不明な限り(私の懇意な某禅僧の意見によると、この詳細は現在の大徳寺当局でも

恐らく判らないだろうとの事である)利休処刑の時点に於て、古溪は恐らく退位後であつたらしく、唯利休が十一歳の年長であつた事の外、利休古溪両人の関係は判明せず、従つて利休処刑に関する証拠は何一つ浮び上つて来ないのである。

竹生島と平経正

辻 旭城



わかれ湖の子さすらいの、旅にしあればしみじみと...。琵琶湖周航の觀光船は丸は、こんな歌にのつて浜大津港から湖面をすべり出てゆく。

左に比叡、比良の山々、湖岸に堅田浮御堂前方に琵琶湖大橋など湖畔の代表的觀光ルート...。琵琶湖大橋を過ぎ周航船が北湖に入ると、湖面は紺碧に白波をたてた海原の姿を見せて、さすがに蘆湖は大きい。右は三上山沖の島、長命寺、多景島、白石島から遠く伊吹の霊峰を眺めながら、平家物語・平経正の竹生島詣を想起していると、やがて名物の竹や古杉老松に囲まれた竹生島に着く。

竹生島は花崗岩からなる周囲約二キロ、面積〇・一四方キロで、最高点は湖面上二二二米、周囲は断崖をなして湖面に没し、只僅

かに東南の岸角に港を持つ。四十八年夏北江州を襲つた豪雨で、島の観音さままで有名な宝殿寺裏山の一部分が地滑りして崩れ落ち、境内石造五重塔(鎌倉時代、重文)が土砂に埋れて倒壊し、又唐門(桃山時代、国宝)も土砂のため検造りの化粧台が一部損壊した。

このため筆者は五重塔や唐門には行くことが出来ず、正面の急勾配の長い石段をあえぎながら登り、弁財天堂に参詣したあとは宝物殿を拝観するだけで、厳宮寺や都久布須麻神社への道は通行止めで参詣出来ない。弁天堂の広場入口に特設された観音堂出張所で、西国めぐり第三十番札所の御朱印を貰い、住職が呉れた添書を出して土産物店に頼み、正面の岩壁に囲まれた入江から発動機舟を雇つて湖上からの竹生島を探勝することにした。この発動機舟は、自分達の家庭と島を結ぶ湖上交通機関で、竹生島へ船便は大津、彦根、長浜からの遊覧船が一日一回だけで、遊覧船が帰つてしまつと数軒ある土産物屋の人達は店を閉じ、全員この発動機舟で対岸の長浜市へ引上げ、島には社寺関係の者だけが残る。観光シーズンが過ぎた冬期は、雪の比良、比叡風が吹き荒れて遊覧船も小舟も通行を停止、島は全くの孤島となつてしまふといふ。

竹生島の眺望は湖上からが良い。水深約八十米、水は碧く澄み、発動機舟が波を蹴り音をたて、快く走る。舟は東に進み都久布須麻神社拜殿の岬の断崖に鳥居の建つた宮崎の沖に出る。巨岩のほとりに風波に耐えた奇松が

茂っている。こんな景観は湖上からでなければ見られない。

琵琶で語られる平家物語の皇后宮亮平経正が、月明の竹生島明神で琵琶を献奏したと歴史に残るのはこのことである。

寿永二年春四月、経正は北国から都を目指す木曾義仲軍を迎え撃つため、平家の軍勢十萬と共に竹生島に近い湖北の海津に指しかる。副将軍経正は琵琶の名手として知られ、音楽の守護神弁財天に参詣し又竹生島明神に戦勝を祈願せんと供侍二人を連れ、漁師の舟で海津の浜から遙かに湖上に浮かぶ竹生島に渡る。経正は上陸すると老禰宜の勧めで宝物の琵琶仙童を借受けて秘曲「玄上」を奏でた。

……緩調、急調、弾しながら唱歌してゆくりうちに、経正はもう全く曲の中に溶け入っていた……。いつか陽は比良のかなたにうつつき、湖上一面に漆色を深めていた、と文豪吉川平家は、その時の情景をこう書いています。

いま竹生島の宝物殿には、経正が弾いたという仙童の掬が飾られている、掬は象牙でつくられ鉛色に変色していた。

### 我が道を行く

六十五年(二七)

西郷 天風



され、周囲の一つ一つの岩礁が神秘的な伝説に包まれている。正面の笠岩でも、汽船のなかつた頃風波の為に小舟が島に辿り着くことが出来ない時には、巡礼者が笠をその岩に掛け御詠歌を唱えて引返したと云われる。

山本旭仙師鹿兒島に去って約一ヶ月後、私の許に第一信が届いた。その時は既に先方で教授所を開き、水戸に戻り来る気配がなければかりか私にも鹿兒島へ来いと云うのであった。併し何分にも遠方のことでもあり、少なくとも一ヶ月位の旅行になるだろうからそう簡単には出かけられぬと返事をすれば、二信では、旅行では駄目、永住の決心で来いと云う。それには何とも返事の仕様がなかった。薩摩琵琶の本場に尻込みした訳だが、その内旭仙師自らやって来た。尤もそれは私の為ではなく水戸の門人達の要請によるもので、責任上二ヶ月位ずつ年に四回、夫人と交替で出張教授の約束が決定した為であった。

鹿兒島へ呼ぶ問題で既に落付き先まで決定してあると云う。その独断的行為について旭仙師の釈明によれば、私の生涯を通じてこれ程よい機会はないだろうと思つたからであり、この起りは、以前から懇意にして居たさる琵琶店の主人から、水戸には森田天風(その頃の私の芸名)と云う薩摩琵琶師がおる由、御存じかと問われ、驚き乍ら「御存じどころか、それは親爺に頼まれて披露演奏会の準備までして呉れた人ですよ、その天風氏を鹿兒島のおなたがどうして?」と問返せば、実は農林技手の弟が水戸近郷の高萩という町の営林署に勤務しており、水戸の琵琶会で天風師出演とあれば必ず聞きに行く程のファンで、その都度本場でも稀な程の存在と賞賛を惜しまぬ通信があるのだったという。

に立推の余地なき聴衆を収め、薩摩準人好みの熱演で市民達の琵琶に対する認識を新にする等、我々地元在住の身辺も安閑としてはおられぬ時代となって来た。仄聞する処によれば有馬師には警視庁高官の縁者があり、その紹介状を持って全国各地に、琵琶を通じて精神教育に資するのが目的のことだった。

斯る事から我々の琵琶会も亦小規模乍ら一応社会性を持つまで成長した。或時水戸市外上水戸地区に大火災があり、卒先して慈善琵琶会を催したところ案外多額の浄財を得、其義損金贈呈に当り会場富栄亭主人の要望頻りになるに依り、手続き一切を彼に任せられた。処が二、三日後琵琶会関係の一人から注意されて市役所前に仰々しく立られた大看板を見れば、肝心の琵琶会の名を表示せず富栄亭単独の義捐らしく掲げてある。之はケンカランと会員二名を伴ない抗議を申込み彼忽ちヤクザの本性を現わし、日本刀を私の膝頭に近い畳に突き刺し威嚇に出たが、さすがに良心が低

のめいてか、手元が狂って刀の刃の方は彼の膝頭に向き、私の方には鎖を見せて少しも凄味がないまま、思はずセムラ笑いとなった。途端に彼も態度を和らげ結局、寄贈者は琵琶会で、富栄亭は世話人と書き改めて落着を見たが、彼の立場は余程苦しかったと見え、まことに洩い面持だった。

大体この水戸市には演芸後援会と称するヤクザの集団があり、水戸近郷での興行の際はこの後援会にワタリをつける習慣であるが、

私は興業師では無く、琵琶会も興業に非ずとして後援会には没交渉で押通していた。併しそれが頻りに催されるにつれ、彼等としても面目上無視する訳にもゆかず、遂に何のかわんの子分達を差向けて来るようになった。

その頃世界列強国間に於ける軍縮会議の結果、日本陸軍の縮少を迫られ民心動揺のなかで、一方には歌謡曲溢傷の様相を呈し、若者達の間に唄われるに至ったのが、先づ「ロシヤ」の小説「復活」による

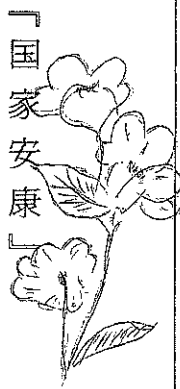
「カチューシャ可愛や別れのつらさ  
せめてあわ雪、とけぬ間に、神に願いを  
ララ、かけましょか」  
であり又  
「行こうか 戻るかオロラの下を、  
ロシヤは北国、はてしらす  
西は夕焼け 東は夜あけ  
鐘が鳴ります、なか空に」  
こうした唄声が各地で聞かれる頃、山本旭仙師は遠く沖繩にまで筑前琵琶の進出を試み、教授所を那覇に設けてその異国風の民情を頻りに伝えてよこすなかで、今日記憶にあるものは「アングア」という、女郎買に似て非なる風習のある話題で、共同墓地に関するものもあるが、それは割愛するとしよう。(未完)

(訂正)六月号三頁本題の下段四行目「」の次ぎに「その筑前琵琶こそ、これからの時代を背負う」が脱字してしまいました。執筆者と読者にお詫して訂正します(係)

来たる八月一日発行の本紙は例年の通り夏季特別号とし紙数を増して内容豊富な記事を満載、併せて暑中交礼号として貴名を掲載させて頂きたいと存じます。

### 夏季特別号発行について

遠隔地同好者間の旧交を温ため、且つは京絃援助の思召しをも含めて多数御協賛下されたく、別紙申込用紙に料金を添え七月十日迄に御申込み願います。



志賀 一

京都東山の天台宗方広寺梵鐘の、天上から吊り下る大きな銅鐘の浮き彫りの鐘銘文中、六行目の「国家安康」と七行目の「君臣豊楽」は、観光客に判り易いように白い線で囲んである。

慶長三年秀吉死去、同五年関ヶ原合戦、西軍に参加して家康に取潰された大名は九十家大中の滅封処分の大名家は四家に達したという。表面は豊太閤の後継者としての誇りを示している、秀頼は六十五万七千石の大名なみ

で、大阪城に住むことを許されている身だつた。然し大阪城には秀吉が庭石から泉水の蟹まで金塊で造っていた程の大きな財宝がある。何れ秀頼を滅亡させ徳川万歳の世にせんとする家康は、豊臣家の財を無くさせる為、秀吉の追善供養を名目に神社仏閣の建立修繕を淀君に勧めた。

淀君はこの勧めを快く引受けた。神仏の力に頼りてもう一度豊臣家再興を謀らんと、社寺の造営修築工事に女の執念を燃やした。東寺、河内富田八幡宮、摂津勝尾寺、多田院、石清水八幡、鞍馬寺、生国魂神社等々京都大阪や近畿社寺の数々が、慶長年間に豊臣家施主となって新築、修理された。殊に秀吉建立の方広寺は、慶長元年の大地震で大仏が潰れたので、この再建は同十四年着工、十九年八月落慶法要を迎え、京阪神の外福井、滋賀、三重、岡山その他から天台宗五百人、真言宗五百人の僧侶が出仕する事になっていった。

法要を間近に控えた七月二十一日、家康は側近の金地院崇伝と板倉内膳を召し、鐘銘中の「国家安康」「君臣豊楽子孫殷昌」は家康を呪い豊臣を君として子孫の繁昌を羨しむ意味であるとして法要の中止を命じた。この鐘銘は名筆家の南禅寺住職清韓文英長老の文章であるが、家康の胸中を察した側近南光坊天海らの入智恵でこの珍解釈が生まれた。はじめ鐘銘の草稿を清韓長老が天海僧正に見せたところ、天海が「国家安康 四海施化 万歳伝法 君臣豊楽」の十六文字を入れるよう要

求したというのである。

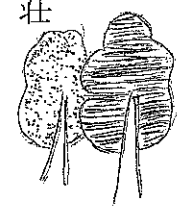
豊家隆盛を願い莫大な費用を以て再建した方広寺が却って豊臣滅亡の因となった。この鐘は徳川幕府二百五十年間撞く事を禁じられていた。方広寺の記録によると、維新迄は無事だったが、明治三年恭明宮建設のため鐘楼を取こわし、明治十七年皇室や一般の寄附金によって再建された、と記してある。

風雪は流れた。方広寺の住職は「当時鐘を鑄つたが、矢張り家康が秀頼打倒のため無理難題を通した証拠であろう」と云う。

第三の人生

人生楽しむ 楽寿荘

神戸 老公子



第三の人生// 幽玄なる琵琶を楽しむ。茲に楽しむとは何ぞや、苦しみも又楽しむと化せば至福とも云う可きか。

「楽しむ会」も足かけ三年になりその趣旨もほど達成したようで、この辺で発展的解消し新境地に飛躍するのも悪くないと思う。でもこの儘で結構だ、続けて行こうとの強い希望があれば、それに従うのがセオリーでもある。同会に集る御人は当然高齢者が多く、十人十色とは云え好きなき道でもあり時に談論風

発、勝手放題の云い放しである。

兎に角琵琶界の裏表はよく知りつくし、老人特有のオーバーな表現で話題は仲々尽きず綿々として続く正にイヤミ氏でもある。老人は過去に生き青年は明日に生くとか、明日を語る老人は稀である、矢張り老化現象の為せる業であり前進がないのだな。たまたま琵琶界の将来を語り合っても悲観論が多い、尤もな事と思いつながら老生も苦吟する。

明治以来軍国主義華やかなりし頃、そして今の様にゴージャズなレジャー時代と比較して琵琶の衰微を嘆くのは、時代現象を把握しないからである。さり乍ら伝統琵琶は亡びる事なく、形をかへて次代に生きるであろう。一応第一線から退いたわれわれ同人達は、一日でも長生きして好きな琵琶をお互いに弾じる事がより望ましく、亦本人の幸せでもあると云うものである。只老生の夢は、七五調にとらわれず叙情的な新しい歌詩を、美少女が濁りのない澄んだ奇麗な声で、弾法も新譜で心のうちを表現するような聖女の出現を祈るのみである。

言寸(28)

松虫・鈴虫 後鳥羽院の寵愛を受けていたこの二女性が安楽、住蓮の二僧をそれぞれ恋い、共に入門したので二僧共死刑に処せられた。法然上人、親鸞聖人の流刑もこれに因縁をもつという

醍醐三宝院の 豊太閤が慶長三年春豪華したと云われる京都伏見区の醍醐三宝院大広間四月二十日昼大阪琵琶同好会主催の首記が開かれた。境内は満開の桜花で埋まり大勢の聴衆を前に薩筑会員の熱演や日舞の杵屋志津松(寺尾旭吉栄女史)、詩吟数番などで多彩なプログラムが展開された。扇舞君が代

一立方島津屋都 石童丸一矢野旭信 舟弁慶一水谷旭甫 井伊大老一作花旭友 扇合戦一旭仙 本能寺一辻旭城 姫ゆりの塔一石橋旭嶺 花吹雪一田中敷水 大楠公一寺尾旭吉栄 小栗栖一中山鳳水。

故森脇旭悠先生 四月二十日昼松山市民追悼演奏会 会館小ホール、主催愛媛琵琶連盟、後援県教育委員会外。東京押田旭窃先生を来賓に迎え厳粛且盛大に開催。君が代一會員 白虎隊一東西 扇の的一森本 太田道灌一太木 秋風故郷山一丹 城山一渡辺 本能寺一山、升沢、稲葉 壇の浦一齊藤旭苑 衣川一井出旭明 禪師と正宗一和田旭秀 屋島一湯藤旭窓 故森脇先生を偲んで一門下有志 坂本竜馬一遠藤旭佳 大楠公一西森旭生 重衡一村上旭隆 西郷隆盛一京関旭訓 鴨川の露一白石旭優 鉢の木一佐々木那水 壺坂寺一谷口旭美 壇の浦一石塚旭奏 琵琶舞白虎隊一浅田芦水、尺八剣舞付 青葉の笛一升久旭好 敦盛一栗田紅水 井伊大老一佐竹旭都 屋島の誓一佐藤晃絃 大森彦七一押

田旭窃。外に詩吟一題。

旭 粧 会 五月十八日昼東京高円寺会 春の演奏会 館、主催原島旭粧女史、後援東京旭会外。衣川(ト)旭英 小督一粧園 五條橋一旭典 松の廊下一旭花、旭志 若き敦盛一旭由美、旭美美 曾我夜討一旭盛 敦盛一旭高 皇女和宮一旭芳 衣川一旭治、旭粧旭美美 扇の的一旭志 赤垣源蔵一旭華 壇の浦一旭美美 忠度一旭昌 秋風故郷山一旭蓮 羅生門一旭蓮、旭粧、旭昌 月に偲ぶ一旭粧外十人 山田長政一峰旭孝 伽羅の兜一高千穂旭楓 安宅の関一若宮旭登 白虎隊一仲川秀邦 唐人お吉一藤巻旭鴻 小栗栖一樹本旭風、旭粧、旭楓 湖水渡一押田旭窃 土屋主税一會主原島旭粧。外に詩吟、日舞七題

琵琶名流 五月二十日昼東京大手町農協演奏大会 会館、主催日本琵琶楽協会。五條橋一太知里穂仙 旅順の乃木将軍一内田旭章 平忠度一佐藤采水 坂崎出羽守一谷口旭節 城山一池野谷吟岫 白虎隊一座間桜水 大物の浦一小原旭成 錦の御旗一柏木宣道 嵯峨野の秋一弘沢雨水 大楠公一山田旭芳 薄陽江一鈴木鶴福 名月逢坂山一鈴木流泉 義士の本懐一中村旭園 勸進帳一小沢錦弥 北の庄一林田旭城 曲垣平九郎一藤波桜華 本能寺一三浦蓮水 道成寺一広瀬翠紅 彰義隊一大家岳峻 敦盛一石坂鶴朋 小栗栖一板谷旭邑 横笛一山田洲鳳 堅田落一若宮旭登

六月二日朝まだき一伊集院鼓城。

浅野晴風 五月二十四日夕六時東京中リサイタル 野文化センター(千五百円) 独得の芸風を持つ浅野氏の首記は成功であった。実盛一大関英子、竹内寿風、太田尾青枝 諸遊青記代、坂崎出羽守一晴風 接待一山下晴楓、野口嶮水、本橋錦風、福島脹水 高瀬舟一晴風(勸進帳一(富樫)山下晴楓(弁慶)浅野晴風。

竹下翠風 五月二十五日昼東京杉並区春の演奏会 浜田山会館。白虎隊一太木翠 本能寺一竹下紫風、絃翠風 朗詠古城の歌一竹下光子、ギター竹下光彦、独唱竹下玲山、尺八戸室清山 短歌舞踊二題一竹下光子 舞二人 道成寺一広瀬翠紅 西郷隆盛一平井洲誠 詩吟高登一竹下翠風 安達ヶ原一鈴木流泉 秋思一翠風外八人、尺八舞踊付。外に詩吟、和歌、朗詠、剣舞、居合道等二十四番の異色公演で盛会。

三位研修同志会 五月二十五日昼三鷹市第二十一回例会 上連雀公会堂。乃木将軍一伊藤友彦 須磨の春一富田晴萌 西郷隆盛一伊藤馨水 似俄一西村蜀峻 常盤御前一篠宮櫻水 城山一伊集院鼓城 薄陽江一坂本錦道、以上演奏終了後懇談会に移り閉会、尚次回は六月二十二日(日)昼同所にて開催予定。